

## なぜ島唄を習うのか？ —奄美大島における島唄教室の調査から—

梁川英俊

鹿児島大学法文学部

### Why Do People Learn Shimauta? A Survey of Shimauta Schools in Amami-Oshima Island

YANAGAWA Hidetoshi

Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University

#### 要旨

島唄学習者では若い世代が注目を集めている。しかし今回奄美大島の5つの島唄教室で行った調査では、退職後の世代もそれに劣らず多く、また熱心であることが分かった。とくに公民館講座では、生徒のほとんどが60歳以上であった。彼らは大半が奄美大島生まれだが、習い始めるまで島唄をほとんど知らない。奄美大島では、島唄は年老いてから自らのアイデンティティーを再確認するための手段のひとつになっているようだ。

キーワード：奄美大島、島唄、公民館講座、教室、アンケート、老後の楽しみ

#### Abstract

We know that many young people learn Amami fork songs called Shimauta. But a survey I did in five shimauta schools in Amami-Oshima Island in November 2010 reveals that many old people learn Shimauta diligently. Especially in community centers, almost all students are over 60 years. They were born in Amami-Oshima Island, but they have known almost nothing about their fork songs before learning. Shimauta seems a symbol of their identity that becomes more important with age.

**Key words:** Amami-Oshima Island, Shimauta, community center, shimauta school, questionnaire, sunset pleasures

#### はじめに

奄美大島ではどのような人が、どんな動機で島唄を習っているのだろうか。この疑問に答えるべく、2009年11月12日より11月18日まで奄美大島で島唄教室の調査を行った。

一口に島唄教室といっても、奄美大島ではその規模や種類は多様であり、調査の結果もどこに照準を合わせるかでかなり異なったものになるはずである。今回は期間も限られていたため、調査対象とする教室の選択は、最初からその期間内に開かれる教室に絞られた。

なかでも優先的に選択したのが、公民館講座である。筆者はこれまで唄者が個人で行っ

ている教室や子供を対象とした教室は幾度か調査したことがあるが、公民館講座は一度もない。しかし一般の人が島唄を習いたいと思ったとき、まず考えるのは公民館講座であろう。したがって公民館講座の受講生の声は、島唄学習者全般の声を最もよく反映しているのではないだろうか。

しかし奄美大島公民館で行われている島唄講座は、筆者が調べただけでも十指に余り、加えて通常は2週間毎の開催で、一通り見て回るだけでも2週間はかかる。そのなかで今回見学できたのは2講座のみであった。それ以外に、唄者や三味線奏者が自宅で行っている教室を3つ見学することができた。調査に協力して下さった教室は以下の通りである。

- ①笠利公民館講座「島唄（初級）」（講師：当原ミツヨ／当原秀毅）
- ②住用公民館講座「島唄の基礎練習」（講師：生元高男）
- ③石原久子三味線教室
- ④阿世知幸雄三味線教室
- ⑤坪山豊教室

調査方法は教室の受講者を対象にしたアンケート調査である。設問は性別・年齢以外に選択肢は設けず、記述式を基本とした。結果の分析は煩雑になったが、その分受講者の生の声が聞けたと思っている。筆者の訪問に快く応じてくださった各教室の講師、生徒の皆さんには深甚の感謝を表したい。調査期間はあいにく行事の多い時期と重なり、教室には普段よりも欠席者が多く、回収されたアンケート数も少なかった。結果については、それぞれの教室ごとに表にまとめた。アンケートの設問は以下の通りである。

1. 性別をお答えください。  
 男       女
2. 年齢をお答えください。  
10歳未満    10代    20代    30代    40代    50代    60代  
70代      80才以上
3. お住まいの地域はどちらですか。
4. 出身地はどちらですか。（奄美出身の方は具体的な島名・集落名までお書きください）
5. シマウタを習おうと思った動機は何ですか。（できれば、この教室を選んだ理由も含めて）
6. シマウタを習い始めるまで、どのくらいシマウタのことを知っていましたか。
7. シマウタを習い始めてよかったことは何ですか。

#### ①笠利公民館講座「島唄（初級）」 講師：当原ミツヨ／当原秀毅

平成元年に日本民謡大賞を受賞した当原ミツヨ氏による講座で、三味線を夫の秀毅氏が担当。18曲からなる手作りの歌詞集に収録されている島唄を、講師とともに生徒全員が次々と歌う。三味線譜はない。この講座の総生徒数は37人であるが、この日の出席は8人であった。

当原夫妻は同じ公民館で「島唄（中級）」というもうひとつの講座も持つ。この講座は個人レッスン形式で生徒数は15人程度。コンクールを目指す生徒が多く、決められた課題曲を一人ずつ歌い、講師が歌い方を指導するというのであった。なおコンクールへの参加者は初級講座でも適宜募集しているようであった。

生徒数	8
性別	男（1） 女（7）
年齢	50代（2） 60代（5） 70代（1）
居住地	笠利町（8）
出身	龍郷町（1） 笠利町（8）
動機	友達（3） 島人の意気込みを身につけたい（1） 島の文化を大切に（1） 祖父祖母を思わせて、懐かしい（1） 年老いた母（1） 老後の楽しみ（2）
知っていたか	あまり知らない（2） シマウタの方言がわからない（1） 2曲くらい（2） 若い頃三味線を少し習ったが、曲はぜんぜんわからない（1） 敬老会で先輩 が歌っていたのを何気なしに聞いていた（1） 親が歌っていたので耳にして いた（1）
良かったこと	島の祖先の心が分かり、懐かしい（1） 島に生まれて島唄のひとつも歌える ようになったこと（1） 島の文化を大切にしたい（1） 声を出して歌うのが 楽しい（2）ストレス解消（2） 生きがい（1）

※（ ）内の数字はすべて人数

## ②住用公民館講座 「島唄の基礎練習」 講師：生元高男

宇検村生勝出身の唄者、生元高男氏による講座。講師自身が採集した29曲からなる「しまうた集」をテキストとして使用し、全員で声を合わせて歌う。三味線はすべて講師が弾き、三味線持参の生徒はいない。高齢者が多く、和気藹々とした雰囲気、コンクールを目的とするような人はいないようであった。講師の生元氏はこの講座のほかにも、自宅や婦人会などで多くの生徒を指導しているとのことであった。

生徒数	9
性別	男（1） 女（8）
年齢	60代（1） 70代（6） 80代（2）
居住地	住用町（9）
出身	沖縄（1） 住用町（8）（うち3人が現住所と同じ）
動機	ふれあい・老後のたのしみ（4） ボケ防止（2） 大声を出すのは健康にいい （1）
知っていたか	（まったく・ほとんど）知らなかった（4） 回答ミス（5）
良かったこと	友達ができたこと（4） 少し歌えるようになったこと（2） 楽しかった昔を 思い出す（1）

## 阿世知幸雄三味線教室

カサン唄の三味線の名手である阿世知幸雄氏の教室。氏が営む名瀬の三味線店で、週末と木曜日を除いて毎日開かれている。月曜が上級、火曜が中級、水曜がコンクール出場者、金曜が初級とレベルによって曜日が分かれる。今回は初級の教室を見学させていただいた。生徒は女性の一部を除いて皆が三味線を弾き、講師が作成した三味線譜もあつた。コンクールへの参加にも積極的なようであった。

生徒数	8
性別	男（4） 女（4）
年齢	40代（1） 50代（1） 60代（5） 70代（1）
居住地	名瀬市（8）
出身	龍郷町（3） 住用町（1） 笠利町（2） 名瀬（2）
動機	好き（3） 笠利唄の先生（1） 友達の誘い（1） 老後の楽しみ（1） 奄美に生まれて少しは島唄もできなければ（1） 島の文化にふれる（1）
知っていたか	まったく知らない（4） 少し（3） あまり好きではなかったが大好きになった（1） 親がやるのを子供のころから聞いていた（1）
良かったこと	楽しい（2） 友達ができた（3） 島の文化にふれた（2） 生活が充実（2）

### 石原久子三味線教室

宇検村湯湾出身で、ヒギヤ唄の重鎮として知られる石原久子氏の教室。長年地元の湯湾で三味線教室を開いているが、宇検村公民館でも第一、第三火曜日に指導している。子供は7時30分から、大人は8時からで、受講生は26名。残念ながら今回は公民館講座の見学はかなわなかった。しかし公民館講座の子供のなかで特に熱心な子には、別に時間を設けて自宅でも教えており、幸いそのうちの一人の練習に立ち会うことができた。土曜の早朝であったが、三味線を弾きながら歌う子供を中心に、父親も三味線を弾きながら歌い、母親も声を合わせていた。

生徒数	4（家族）
性別	男（2） 女（2）
年齢	子供（1） 小学生（1） 30代（1） 40代（1）
居住地	宇検村湯湾（4）
出身	宇検村湯湾（4）
動機	子供がはじめたから（1） 島唄が大好きだから（1）
知っていたか	20%ぐらい（1） 朝花節くらい（1）
良かったこと	じい、ばあがよろこぶから（1） 家族がみんなで、できたから（1）

### 坪山豊教室

奄美大島の代表的な唄者として知られる坪山豊氏の教室。特に教室の看板は出していないが、名瀬の自宅で週末を除いてほぼ毎日行われる。初心者も上級者も一緒に教えるというのが信条で、クラス分けはしていない。生徒数は調査時には20数名とのことであった。坪山氏によると、生徒が唄を習う動機はさまざまだが、本土からの学校の先生たちが熱心で、ときに島人よりも熱心だとのことであった。本土から習いに来る人もおり、調査時には20代前半のフランス人女性も習っているとのことであった。なお、今回のアンケートに協力してくれた生徒の中には母親が一組あった。母親の「自分の集落や親戚に三味線を弾ける人がほとんどいないのに驚いた」という言葉が印象的だった。

生徒数	3
性別	女（3）
年齢	10代（1） 40代（1） 60代（1）
居住地	奄美市（2） 名瀬（1）
出身	龍郷町（1） 笠利町喜瀬（1）
動機	祝いの席が多く、三味線ができれば喜ばれるから（1） 何か音楽をしたかった。三味線に興味があった。三味線がかっこいい（1） 奄美に生まれて知るべきだと思い始めた。両親がシマウタを歌っていた（1）
知っていたか	幼少の頃から父がシマウタをやっていたので知っていた（1） ぜんぜん知らなかった（1） 自然に聴いていたがほとんど勉強はしなかった（1）
良かったこと	島の伝統文化にたずさわっていること（1） 先生の話が楽しい。楽しみが増えた（1） いろいろな集まりで、シマウタを聴く機会が多くなった（1）

### まとめ

はじめに述べたように、今回の調査では時間的な制約もあり、ごく一部の教室しか対象とすることができなかった。しかしながら、これまでの調査ではほとんど接したことがない年配の島唄学習者に協力していただけたのは大きかった。

島唄人口は若者か老人に二分され、その狭間の40代、50代の子育て世代、あるいは働き盛りの世代はほとんどいないということは、これまでも多くの唄者から聞いてはいたが、島唄学習者では子供や若者がクローズアップされることが多く、高年者の学習者については分からないことが多かった。そのなかで、公民館講座はもとより個人教室でもこれほど多くの年配者が島唄を楽しんでいるという事実は、筆者にとって正直予想外であった。島唄は奄美大島では文字通りの老後の楽しみ、貴重な友達作りの場として確かな地位を得ているという印象をもった。年をとって時間に余裕ができ、何か習い事をするときに島唄が自然と選択肢のなかに入ってくるというのは、やはり奄美特有の現象と言えるだろう。

また受講者のほとんどが、それまでは島唄のことをほとんど知らなかったと答えていたのも印象的だった。これまで奄美諸島を調査していて、巷間よく言われる「島では生活のなかに唄がある」という言葉が、必ずしも現実を反映してはいないと感じてはいたが、改めて確認した形である。むしろ受講者にとって島唄とは、長く島で生活してきて、退職や子供の自立などを機に自分の人生を振り返ったり、自らのアイデンティティーを確認したりするときに初めてその存在に気づくという種類のものであるようだ。そのことはまた、島唄教室を選ぶときに大半の人が自分の居住区に近い教室を選び、自分の土地の唄を習いたがるという傾向にも現れているだろう。わずかな期間ではあったが、改めて島唄は人生とともにあるという事実を再認識させられた調査であった。